

平成 29 年 7 月 26 日  
わらしべ会 社 和也

## ●会議要項

- ・日 時：平成 29 年 7 月 21 日（金）10：00～12：00
- ・場 所：全日本柔道連盟会議室（東京都文京区本郷 1 丁目 33 番 13 号）
- ・出席者：16 名（別紙）

## 1) 概 要

- ・会議を開催するに至った経緯は、国際柔道連盟（I J F）が国際知的障がい者スポーツ連盟（I n a s：アイナス）のグローバルゲームズ（アイナスの国際大会）を支援するにあたり、全日本柔道連盟（全柔連）に日本からの参加要請や日本国内の知的障がい者柔道の整備について要請があったことに起因する。
- ・要請を受けた全柔連は、知的障がい者柔道に関する情報をほとんど持っておらず、国内の関係者が集められてまずは情報を集めたい、というのが今回の会議の目的であった。
- ・全柔連にあまりに予備知識がなかった様子で、もちろん方針も現段階でははっきりせず、会議の論点も定まらないところがあったので、各論は次章で箇条書きでまとめることにする。
- ・会議の冒頭で、全柔連事務局長中里氏が、「ひとりでも多くの人に柔道を共有してほしい」「全柔連が核となって、知的障がい者柔道の普及に努める。」との言葉があったが、国際競技参加のためのエリート知的障害者柔道競技者を育成し、派遣するだけの話し合いに今後向かっていくだけに終わってほしくないとの感想を持った。
- ・今後もこのような形で連絡会を続けていきたいと言う、全柔連の意向に期待したい。

## 2) 論点、報告など

- ・西川病院の西川氏からは精神障害者対象の柔道療法の効果、青鳥特別支援学校の角杉氏からは学校での取り組みと課題などが簡単に報告された。
- ・福山大学中村氏からは S O 広島で行なった柔道プログラム、まだ実施していないが S O 和歌山として今後の取り組みを考えている楠山氏からはこれまでの経過が話された。
- ・日本パラリンピック委員会中森氏、日本知的障がい者スポーツ連盟および I n a s アジアの野村氏、S O 日本の園部氏からはそれぞれの組織の成立の経緯、参加者の特徴などが話された。これまで S O しか関わりがなかったが、知的障害者スポーツの組織は世界的にいくつかあることを知った。ただこれらの組織はスポーツ全般を対象としているので、「柔道」という競技に絞って言えば、やはり全柔連のような団体が整理の窓口になってもらうことが望ましいように思われた。
- ・それぞれに興味深い内容であったが、主催者の全柔連が事前に出していた会議の開催要項に記載されていた「情報を共有したい事項」にかみ合う話ではなかった。

開催要項に記載されていた「情報を共有したい事項」

- (1) 全柔連の方針と本会の位置づけ
- (2) 国内外における取り組み事例（大会、指導員研修や資格、昇段の現状）
- (3) スペシャルオリンピックス柔道と INAS 柔道の現状
- (4) 今後のスペシャルオリンピックスへの参加
- (5) 2018 年以降の国際柔道連盟（IJF）世界知的障がい者柔道選手権大会への参加
- (6) その他

・この項目に沿って言えば、今回確認できたのは以下のとおりである。

(1) 全柔連の方針と本会の位置づけ

- ・冒頭の中里氏の言葉によれば、「ひとりでも多くの人に柔道を共有してほしい」「全柔連が核となって、知的障がい者柔道の普及に努める。」とのこと。
- ・またこれをきっかけに連絡会を作り情報共有を継続していくとのこと。

(2) 国内外における取り組み事例（大会、指導員研修や資格、昇段の現状）

- ・各組織の参加者から大会全体の報告があったが、柔道としてどうなっているかはあまり情報がなかった。
- ・指導員研修や昇段の現状については、話にあがらなかった。

(3) スペシャルオリンピックス柔道と INAS 柔道の現状

- ・参加者の幅が広くすそ野が広い SO と競技色が強い I n a s の違いが少し理解できた。
- ・ただ、いずれにせよ濱名氏ですら「I n a s」の現状が分からない、とのこと。

(4) 今後のスペシャルオリンピックスへの参加

- ・話題が I n a s に偏っていたので、全柔連と SO が今後どのように関係を作っていくのかは分からなかった。
- ・SO 側からも特にこのことに関する発言はなかった。（余談であるが SO は今年 5 月日本知的障がい者サッカー連盟とパートナーシップ協定を結ぶなどの連携作りを行なっている。）

(5) 2018 年以降の国際柔道連盟（IJF）世界知的障がい者柔道選手権大会への参加

- ・この「国際柔道連盟（IJF）世界知的障がい者柔道選手権大会」なるものがどのようなものかについての説明はなく、I n a s の大会を I J F が支援するという形なのか、I J F 独自の大会なのかすら、十分な説明がなく把握できなかった。
- ・なお、当日資料で配られた英文の「世界大会」の開催案内は、I J F、I n a s の支援を受けたドイツの組織が行なう大会で、今年 2017 年 10 月 19-22 日ドイツのケルンで行なわれる。会議のなかでは、この大会参加リストの中に「J a p a n」が記載されていて、これが国内のどの団体？個人？なのか誰か知らないかという問いかけがあったが、だれも知る者はなかった。

- ・私自身は、会議の開催にあたってのアンケートに次のような提起をした。

本会議がどのような内容になっていくのかにもよりますが、当会の知的障害者柔道教室では現在以下のような課題意識を持っております。

- ・当会では昨年一般の昇段試験で初段となった参加者がいますが、多くの知的障害者が黒帯に憧れを持ちながらも昇段は難しい現状にあります。知的障害柔道独自の昇段システムが必要と考えています。
- ・障害者柔道に理解を持つ指導員資格と研修制度が必要かと思われます。
- ・ヨーロッパでは個別で知的障害者の柔道が組織化され、大会等も開かれていると聞きます。海外の現状把握が必要と思われます。
- ・知的障害者柔道として展開している組織は今回参加されている団体に限られているのが現状と思いますが、一般の少年柔道教室などでもダウン症や発達障害児、知的障害児などを数名受入れておられるところはあるかと思えます。こうした国内の現状調査も必要ではないかと思えます。

### 3) 全体の感想

- ・継続した会議は行なわれるのか、全柔連はどの程度前向きに（「知的障害のある人に対して柔道をする機会を広げて行く」という課題に対して）取り組んでくれるのか、まだ分からない。「継続して取り組む」という発言に期待したい。
- ・全柔連にはほとんど知的障害者に対する実感的な理解はなく、また少しずつ広がりつつあるSO広島、SO和歌山についても、実施している指導者が柔道の経験者・指導者であり障害者支援の経験のある人とは限らない。こうしたことから当会の立ち位置が少し見えてきたように思われた。障害者支援の法人としての知見を活かしていきたい。
- ・全柔連の今後の整理と取り組みを待つ一方、地域で取り組みだされている知的障がい者柔道にかかわる人たちと情報を交換し、現場どうしの連携を強めていきたい。幸い濱名氏（神奈川）、中村氏（広島）、楠山氏（和歌山）はそれぞれの柔道の活動を、積極的にフェイスブックを通じて発信しておられる。

#### ●Inas（アイナス：国際知的障がい者スポーツ連盟）とは

ヨーロッパを中心に組織化されてきた知的障害者のスポーツ組織が、1986年オランダで設立総会を行いはじめた組織。SOよりも競技色が強く、パラリンピックが身体障害者のストイックなアスリート競技化しているのに例えると、Inasはその知的障害者版といった感じか。

世界大会は「グローバルゲームズ」と呼ばれ、2015年のエクアドル大会では、8競技が行われている。（別紙）

日本ではまだなじみがないようで、インターネットを見ても情報は少ない。

柔道は、2009年チェコ大会で競技種目となったが、2011年イタリア大会では「プロモーション競技」となり、その後は競技種目からは外れている。